

各種研究支援制度

先端総合学術研究科研究支援制度

- ・研究科紀要『Core Ethics』等の刊行
- ・先端総合学術研究科出版助成制度
- ・先端総合学術研究科 院生プロジェクト
- ・先端総合学術研究科・研究指導助手
- ・先端総合学術研究科・英語論文指導スタッフ
- ・障害学生支援
- ・留学生日本語サポート
- ・ノートパソコンの貸し出し
- ・プレゼンテーションに必要な機材の貸し出し



立命館大学大学院生に対する奨学金・支援制度

- ・立命館大学大学院博士課程後期課程研究奨励奨学金（給付）
- ・立命館大学大学院学生会参加補助（国内開催学会報告者補助・国外開催学会報告者補助）（給付）
- ・国内開催学会代表参加者旅費補助
- ・立命館大学大学院博士課程後期課程学生会発表補助金（給付）
- ・立命館大学大学院研究生学生会旅費補助（給付）
- ・立命館大学大学院博士課程後期課程国際的研究活動促進研究費（給付）
- ・立命館大学大学院留学協定等にもとづく留学プログラムに対する奨学金（給付）
- ・立命館大学大学院海外インターンシップおよび海外教育実習派遣者に対する奨学金（給付）
- ・立命館大学院生を対象とするベーススキル向上のための支援（給付）
- ・日本学生支援機構大学院奨学金（貸与）
- ・立命館大学大学院貸与奨学金（貸与）
- ・りつめいキャンパスローン
- ・企業および民間助成財団等奨学金事業
- ・立命館大学大学院学生会活動支援制度
- ・TA（ティーチング・アシスタント）



日本学術振興会特別研究員 （合格者数）

2007年度 DC 8名+PD 1名
2008年度 DC 5名+PD 1名
2009年度 DC 5名+PD 2名
2010年度 DC 9名+PD 1名
2011年度 DC 4名+PD 3名
2012年度 DC 9名+PD 6名
2013年度 DC 2名+PD 3名

衣笠総合研究機構専門研究員 （新規採択者数）

2010年度 4名
2011年度 3名
2012年度 3名
2013年度 4名



※先端総合学術研究科の院生が利用できる支援制度の一部です。
制度は変更される場合があり、詳細は、入学手続き時または入学時に説明します。

※立命館大学大学院生に対する奨学金・支援制度の概要
http://www.ritsumeijp/grinfo/grinfo04_j.html

※受験資格や実施時期を詳細に定めた入試要項については、必ず最新のものを大学院課に請求して下さい。
大学院入試 http://www.ritsumeijp/gr/index_j.html
からも申し込みできます。

〈問い合わせ先〉
立命館大学独立研究科事務室
tel 075-465-8348
〈入試要項請求先〉
立命館大学大学院課
tel 075-465-8195
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
ホームページ <http://www.ritsumeijp>

Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences

立命館大学大学院

先端総合学術研究科



出版助成・研究支援制度紹介

<http://www.ritsumeijp/acd/gr/gsce/>

先端総合学術研究科の院生・修了生は 研究成果を積極的に書籍化してきました



(2007年5月刊行) (2008年4月刊行) (2008年7月刊行) (2008年10月刊行) (2009年6月刊行) (2009年6月刊行) (2009年8月刊行) (2009年12月刊行) (2009年12月刊行) (2009年12月刊行)



(単著・編著のみ。共著は除く。)

執筆から

新山智基

『世界を動かしたアフリカのHIV陽性者運動——生存の視座から』

専攻:社会学 研究テーマ:顧みられない熱帯病と国際協力—西アフリカを事例として

本書は、2005年から2007年にかけて、立岩真也先生他の編集によって発行された資料集『貧しい国々でのエイズ治療実現へのあゆみ——アフリカ諸国でのHIV 陽性者の当事者運動、エイズ治療薬の特許権をめぐる国際的な論争』(4部)をもとに、執筆したものです。

私自身はこれまで、熱帯・亜熱帯地域を中心に症例が報告されているブルーリ潰瘍という感染症を取り上げながら、国際協力に関する研究・活動を展開してきました。感染症対策を構築していくなかで、グローバルな課題であるHIV/エイズの動向を見ていくことは、多様な感染症対策を考えていく上で重要なものです。2010年度に博士学位論文を提出し、翌年度にはグローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点所属の立命館大学衣笠総合研究機構ポスドクトラルフェローに採用され、ここでの役割のひとつが、アフリカ関連の企画、情報収集／発信でした。このような接点から、アフリカ・感染症をテーマに研究に携わってきた私が、ひとつの形として本書を書き上げることに至りました。

私がこれまで、また現在行っている研究は、西アフリカ現地に赴くことが必要不可欠です。調査の多くは、日本学術振興会特別研究員DC/PDの特別研究員奨励費及びグローバルCOEプログラムの助成(生存学若手研究者グローバル活動支援助成金)を用いて実施しました。また、幸いにも本書の刊行に際しては、立命館大学学術図書出版推進プログラム(2011年度)の助成を受けることができました。

本書は、2000年以降、エイズ対策に大きな影響をもたらしたアフリカのHIV陽性者運動の展開、国際的なエイズ対策の動向に注目し、紹介しています。執筆の背景には、エイズ、国際協力に関心のある大学生、大学院生、NGOに携わる人など様々な方に、途上国の人々の生命を守る運動・取り組みを伝えたいという気持ちがありました。HIV陽性者運動を取り上げた数少ない文献である本書が、少しでもこうした人たちの役に立つことを切に願っています。

先端総合学術研究科の
院生・修了生の
多くがかかわっている
生存学研究センターでは
雑誌『生存学』を
定期的に刊行しています



(2009年3月刊行) (2010年3月刊行) (2011年3月刊行) (2011年5月刊行) (2012年3月刊行) (2013年3月刊行)

先端総合学術研究科独自の 出版助成制度により これまで12冊が 刊行されました

執筆者から

利光恵子

『受精卵診断と出生前診断——その導入をめぐる争いの現代史』

専攻:科学史・科学技術論、生命倫理学 研究テーマ:生殖技術の現代史

私が、当研究科の門を叩いたのは2005年、50歳の時です。それまで、薬局を自営するかたわら、先端医療技術の問題を市民の眼から検証する活動に係わってきました。1990年代以降は、受精卵診断(着床前診断)導入反対運動に力を注いできました。2004年には臨床実施が開始されたのですが、何が争点とされたのか、この争いは社会的歴史的に見てどのような意味を持つのかを、今一度、広い視野からじっくりと捉え返してみたいと考えたのが入学の動機でした。

授業やプロジェクト演習では、先生方の丁寧な助言を得て、自分自身の研究方法や研究の道筋を見出すことができました。紀要『Core Ethics』への投稿および査読の過程で、議論の組み立て方、論文の作成法を知ることができました。英文要旨作成の際には、英語論文指導スタッフの方々にお世話になりました。また、公募研究会「Body and Society」、院生プロジェクトの「出生をめぐる倫理研究会」や「生命倫理研究会」、「障害学研究会」での院生同士の勉強会や意見交換では、自らの視野の狭さに気付かされることも度々でした。

2011年9月に博士論文を提出し、これをもとに出版助成を得て、『受精卵診断と出生前診断——その導入をめぐる争いの現代史』を刊行することができました。本書は、1990年代初頭から現在までの日本における受精卵診断をめぐる論争の推移をたどり、いかなるパワーポリティクスのもとで、どのような文脈を経て、この技術が導入されたのかを明らかにしたものです。特に、日本産科婦人科学会をはじめとする医療集団と、受精卵診断反対の論陣を張った障害者と女性を構成員とする市民団体との間で交わ



(2011年3月刊行)



(2011年3月刊行)



(2011年3月刊行)



(2011年3月刊行)



(2011年3月刊行)



(2011年3月刊行)



(2012年3月刊行)



(2012年3月刊行)



(2012年9月刊行)



(2012年12月刊行)



(2013年3月刊行)



(2013年3月刊行)

された論争を詳細に取り上げたところに特徴があります。本書が、出生前診断について考える際の素材となり、幅広い議論に資することができれば幸いです。

今後も、女性や障害者に大きな影響を及ぼす生殖技術の動向に注目し、研究を進めていきたいと思っています。

村上潔

『主婦と労働のつれ——その争点と運動』

専攻:現代女性思想・運動史 研究テーマ:主婦の労働／運動

私は、東洋大学で修士課程まで歴史学を勉強したあと、2004年に先端総合学術研究科の二期生として入学しました。当初、研究テーマは漠然としていましたが、公共領域のプロジェクト予備演習でいただいたアドバイスがきっかけとなり、「主婦」に対する評価の意味と、そこからこぼれ落ちる側面、そして主婦当事者たちの自立的な動きについて調べていくという方向性を獲得することができました。

在学中は、公共領域の院生を中心に「高度成長期」研究会を立ち上げて立岩真也教授の協力のもと研究報告書を発行したり、グローバル COE プログラム「生存学」創成拠点の「労働問題・不安定生活・保証所得をめぐる国際的研究」ならびに「地域社会におけるマイノリティの生活／実践の動態と政策的介入の力学に関する社会学研究」の両院生プロジェクトにおいて多くの院生たちと有意義な共同研究を行ないました。

そうした成果の積み重ねから、2008年度に課程博士学位請求論文を提出し、修了することができました。本書はその博士論文をもとに、その後の成果などを組み込んでまとめ直し、2011年度先端総合学術研究科出版助成制度の助成を受けて、2012年3月に刊行したものです。本書は、主婦の「働き」をめぐる評価・運動・実践において、様々なレベルで複雑な力学が生じる状況それ自体を正面から受けとめ、その構造と矛盾を一緒にあぶり出そうと試みました。主婦自身による「主婦の状況」という概念の創出と展開、その状況と「パート労働」との関係性、主婦による自立的な労働実践の可能性と困難などを論じています。従来の女性労働研究とはまったく異なる視点から分析を行なっている点が特徴です。

修了後は、立命館大学衣笠総合研究機構ポスドクトラルフェロー、同機構研究員などを経て、現在は先端総合学術研究科研究指導助手として勤務しています。先端研ならではの手厚いキャリアパス支援があってこそ、こうして研究を続けてこれられました。今後は自分の経験を、業務を通じて現役院生の方々に還元できるよう、尽力していきたい所存です。